

「お互い片思い」は両思い?

郡司 隆男

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所
gunji[at]shoin.ac.jp

Does *otagai kataomoi* ('(lit.) love each other unilaterally') mean *ryoomoi* ('love each other mutually)?

GUNJI Takao

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿では、日本語の「お互い」という語彙項目の相互的な解釈について考察する。まず、郡司(2010)で示した「自分」に関する統語的・意味的な束縛原理が「お互い」にも同様に適用でき、非局所性素性を導入することにより、日本語特有の振る舞いを捉えることができることを示す。その一方で、束縛原理では捉えきれないような「お互い」の解釈が存在することも「自分」と同様に存在することを明らかにする。さらに、「お互い」のもつ、分配性と相互性という性質に関して、共起する述語によっては、相互的な解釈を失い、分配的な解釈のみをもつ場合があることを指摘する。

In this paper, I will treat the reciprocal interpretation of the lexical item *otagai*. First, the syntactico-semantic Binding Principle for *zibun*, as shown in 郡司(2010), is shown to be equally applicable to *otagai*, by introducing a nonlocal feature that is required to properly treat the Japanese case. On the other hand, as in the case for *zibun*, I will point out that there exist interpretations of *otagai* that are not treated by the Binding Principle. Furthermore, noting the two-fold characteristics of *otagai*, distributivity and reciprocity, I will argue that there is a case in which only the distributive interpretation is maintained, losing reciprocity, depending on the predicate with which it occurs.

キーワード: 相互性、再帰性、分配性、束縛原理、非局所性

Key Words: reciprocity, reflexivity, distributivity, Binding Principle, nonlocality

1. はじめに

あるドラマで次のような科白があり、引っかかるものがあった。¹

- (1) (私たち、) お互い……片思いだね。 (岡田, 2017, p. 369)

通常、「お互い」は相互代名詞 (reciprocal) とされ、上の主語が、例えば、奈緒美と健という2人ならば、奈緒美は健のことを片思いし、健もまた奈緒美のことを片思いしていることになる。しかし、以下に示すように、この解釈は矛盾した状況を記述していることになる。

「片思いだ」は「に」格の目的語をとるので、目的語を伴う場合には次のようになる。

- (2) a. 健は奈緒美に片思いだ。
b. 奈緒美は健に片思いだ。

そこで、(1) に、主語「私たち」を明示し、「に」を補ってみよう。

- (3) 私たち、お互いに片思いだね。

これが、2人がともに相手に片思いだとすると意味的に矛盾が生じる。自分たちが相手に対して片思いだと認識しているならば、両思いになり、片思いではなくなるからだ。主語が一人称でなく、三人称ならば問題はない。

- (4) 彼らは、お互いに片思いなんだ。(でも彼らはそのことを知らない。)

この場合、第三者から見たら2つの片思いが存在することになるが、本人は自分だけが片思いだと思っているので、矛盾は生じない。

では、(1) が矛盾した文でないとすると、いったいどういう意味なのだろうか？

実は、ドラマの中では、女は父親の米店で一緒に働く男に片思いをしているが、男は同郷の別の女に片思いをしている。したがって、上の文の意味は、それぞれが相手に対して片思いをしているのではなく、それぞれが別々の人に対して片思いをしているが、二人とも片思いをしているということは同じだということなる。

これは上の文の「お互い (に)」を相互代名詞ととらえたのでは説明できない現象である。この場合は「お互い (に)」はほとんど「二人とも、それぞれ」の意味になっている。次の文と比較してみよう。

- (5) 私たち、お互い似てるね。

これは通常の相互的な解釈が成り立つ。すなわち、2人がそれぞれ相手と似ているという解釈である。実際、次の文は、似ているとされる暗黙の項を想定しない限り解釈できないので、「お互い」は「似ている」の項と考えるしかない。

- (6) a. 健は似てるね。

¹科白のものには主語はないが、文脈から話し手と聞き手であることがわかる。

b. 奈緒美も似てるね。

実は、他動詞的解釈しか存在しない「似ている」とは異なり、「片思いだ」の場合、項をとる他動詞的解釈と項をとらない自動詞的解釈²の両方が可能である。そのため、(1)の場合には、意味的に矛盾の生じない自動詞的解釈が選ばれると考えられる。後に第4節でその分析を示す。³

以下では、「お互い」に2通りの解釈があり、一方の解釈では相互代名詞の項として振る舞うが、もう一方の解釈では相互代名詞ではなく、項でもないということを示していく。

2. 非局所的な「お互い」

日本語の「自分」が、英語の ~self とは異なり、同一節内に先行詞がないといけないという局所性をもたないことはよく知られている。例えば、英語では不可能な、埋め込み文中の「自分」の先行詞が主文にあるという解釈が日本語では可能である。

(7) a. 奈緒美₁は [真理絵₂が自分_{1,2}を責めている] と思っている。

b. Naomi₁ thinks [that Marie₂ is blaming herself_{1,2}].

日本語の「お互い」という語彙項目についても、英語の each other と同じような局所性をもつという考え方もある一方、Hoji (2006, 2010) は、「お互い」が、局所性を示さないことを論じている。例えば、次の文 (Hoji, 2010, p. 19, (34a)) の解釈である (原文はローマ字書き、解釈は英語で与えられている)。

(8) [ジョンとビル]₁は [メアリが [*pro*₁ お互い] に惚れていると] 思い込んでいた。

解釈1: ジョンとビルのそれぞれがメアリが他方に惚れていると思っている。

解釈2: ジョンとビルのそれぞれがメアリが自分に惚れていると思っている。

解釈1は相互的な (reciprocal) 解釈であり、解釈2は再帰的な (reflexive) 解釈である。⁴どちらも、埋め込み文中の [*pro* お互い] の先行詞は、埋め込み文の主語の「メアリ」で

²この場合、後述の (33) に示すように、片思いの相手は存在量化される。

³同じことは、再帰代名詞 (reflexive) とされる「自分」についても言える。

(i) 君が自分で褒めろ。

これは聞き手に自分を褒めることを命令しているのではなく、聞き手が独力で誰かを褒めることを命令している。実際、「褒める」の目的語を入れることも可能である。

(ii) 君が自分で奈緒美を褒めろ。

上は「自分」に「で」がついているが、「を」がつくと、再帰の意味になる。

(iii) 君が自分を褒めろ。

これは、誰も自分自身を褒めようとしないうような文脈を仮定すると、まず、聞き手が率先して自分自身を褒めるように命令しているというような解釈になる。「自分を」は「褒める」の目的語であり、「*君が自分を奈緒美を褒めろ」のようにもう一つ目的語を置くことは不可能である。

⁴Hoji (2006, 2010) では、後者は “parallel/respective reading” と呼ばれている。

はなく、主文の主語の「ジョンとビル」であり、日本語の「自分」と同じように同一節中になくともよい。

筆者には、上の文においては、解釈2の再帰的な読みは難しいが、解釈1のように、文境界を越えて、相互的な読みが可能であるという点には賛成する。ただし、再帰的な読みが「お互い」にまったくないというわけではなく、次のような文であれば可能であると考える。

(9) [ジョンとビル]₁ は [お互い₁ (に) メアりに惚れている] のを隠している。

解釈: ジョンとビルのそれぞれが自分がメアりに惚れているのを隠している。

この場合、「お互い」は埋め込み文の主語ではない。実際、別に主語を置くことも可能である。

(10) [ジョンとビル]₁ は [自分たちがお互い₁ (に) メアりに惚れている] のを隠している。

すなわち、この場合の「お互い」は「惚れている」の項ではなく、「それぞれ」のような意味をもつ副詞句として働いているので、結果的に再帰的な読みが出てくる。

Hoji (2006, 2010) は、また、次の文 (Hoji, 2010, p. 20, (39a)) のような分離先行詞 (split antecedent) の可能性についても取りあげている。

(11) 家康₁ は信長₂ に [信玄が死ねば [pro₁₊₂ お互い] の領土が暫くは安泰だ] と告げた。

ここで、Hoji (2006, 2010) は、1+2 で示される集合読み (group reading) が可能だとしている。次の、「お互い」の代わりに「彼ら」を使った場合と同じ解釈である。

(12) 家康₁ は信長₂ に [信玄が死ねば彼ら₁₊₂ の領土が暫くは安泰だ] と告げた。

筆者には、この文においては、上のような解釈は難しいが、次のような形ならば、相互読みが可能である。

(13) 家康₁ は信長₂ に [信玄が死んだらお互い₁₊₂ の領土を交換したい] と告げた。

この文の解釈は、家康が自分の領土と相手の領土とを交換したいということであり、相互性が関係してくる。

3. 「お互い」の意味論

以下では、これまで述べてきた性質を適切に記述できる「お互い」の意味論を考察するが、その前に「自分」の意味論をまとめておこう。

3.1. 「自分」の意味論

単文内の「自分」の意味論は、他動詞を自動詞化する、つまり項の数を1つ減らす演算子としてとらえることができる。「自分」を他の名詞句と同様に一般化量子としてとらえると、次のような意味論を与えることができる。

$$(14) \text{ [[自分]]} = \lambda Q [\lambda x Q(x, x)]$$

ここで、 Q は一階の 2 項述語（他動詞）に対応する変数である。

これにより、同じ節内の先行詞による「自分」の束縛は次のようになる。

(15) 奈緒美が自分を愛している（こと）。

$$\begin{aligned} (16) \text{ [[奈緒美が自分を愛している]]} \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\text{[[自分を愛している]])} \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\text{[[自分]]}(\text{[[愛している]])}) \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\text{[[自分]]}(\text{Love})) \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\lambda Q [\lambda x Q(x, x)](\text{Love})) \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\lambda x \text{ Love}(x, x)) \\ &= [\lambda P P(n)](\lambda x \text{ Love}(x, x)) \\ &= [\lambda x \text{ Love}(x, x)](n) \\ &= \text{Love}(n, n) \end{aligned}$$

実際には「自分」は非局所性をもつために、束縛の任意性を捉えた形の意味論を与える必要がある。以下では、単文内で束縛されない「自分」を自由変数 z としている。

$$(17) \text{ [[自分]]} = \lambda Q [\lambda x Q(x, z)]$$

(18) 健は奈緒美が自分を愛していると思っている。

$$\begin{aligned} (19) \text{ a. [[奈緒美が自分を愛している]]} \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\text{[[自分を愛している]])} \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\text{[[自分]]}(\text{[[愛している]])}) \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\text{[[自分]]}(\text{Love})) \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\lambda Q [\lambda x Q(x, z)](\text{Love})) \\ &= \text{[[奈緒美]]}(\lambda x \text{ Love}(x, z)) \\ &= [\lambda P P(n)](\lambda x \text{ Love}(x, z)) \\ &= [\lambda x \text{ Love}(x, z)](n) \\ &= \text{Love}(n, z) \\ \text{ b. [[奈緒美が自分を愛していると思っている]]} \\ &= \text{[[思っている]]}(\text{[[奈緒美が自分を愛している]])} \\ &= \text{[[思っている]]}(\text{Love}(n, z)) \\ &= \lambda z \text{ Think}(z, \text{Love}(n, z)) \\ \text{ c. [[健は奈緒美が自分を愛していると思っている]]} \\ &= \text{[[健]]}(\text{[[奈緒美が自分を愛していると思っている]])} \\ &= \text{[[健]]}(\lambda z \text{ Think}(z, \text{Love}(n, z))) \\ &= [\lambda P P(k)](\lambda z \text{ Think}(z, \text{Love}(n, z))) \\ &= [\lambda z \text{ Think}(z, \text{Love}(n, z))](k) \\ &= \text{Think}(k, \text{Love}(n, k)) \end{aligned}$$

ただし、(19b)においては、郡司(2010)で詳述した、日本語再帰化に関する「束縛原理」(郡司, 2010, p. 10, (20))を仮定し、主文の主語と埋め込み文の間で束縛が起こるとしている。⁵

(20) 「自分」の束縛原理

ARGST 内に REFL 素性をもつ項があるとき、その最上位の項と REFL 素性の値とは単一化可能である。

上の「最上位」というのは、次のように定義される、HPSG の「上位にある」(outrank)に基づいている (Sag, Wasow and Bender, 2003, p. 213)。

(21) a. 子と同一指標をもつ親は子と同位である。

b. ARGST 素性の値のリストの中で先行する項は後続する項より上位にある。

ARGST 素性のリストは、〈主語、直接目的語、間接目的語、...〉というように、斜格性 (obliqueness) の低い順に並んでいるので、「最上位」ということは、束縛するもの (先行詞) が、最も斜格性の低い、主語に限られるということである。

ここで、「自分」は次のような語彙構造をもち、非局所素性の REFL は、束縛されない限り、子から親へと伝えられる (郡司, 2010, p. 6, (11))。

(22) Reflexive

$$\left\langle \text{「自分」}, \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \quad \textit{noun} \\ \text{REFL} \quad \langle \text{NP}_i \rangle \end{array} \right] \\ \text{ARGST} \quad \langle \quad \rangle \\ \text{SEM} \quad \left[\begin{array}{l} \text{INDEX} \quad i \end{array} \right] \end{array} \right] \right\rangle$$

3.2. 項としての「お互い」の意味論

「お互い」についても、郡司(2010)の「自分」と同様に扱うことができる。まず、次のような語彙構造を与える。⁶

(23) Reciprocal

$$\left\langle \text{「お互い」}, \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \left[\begin{array}{l} \text{HEAD} \quad \textit{noun} \\ \text{RECP} \quad \langle \text{NP}_a \rangle \end{array} \right] \\ \text{ARGST} \quad \langle \quad \rangle \\ \text{SEM} \quad \left[\begin{array}{l} \text{INDEX} \quad a \end{array} \right] \end{array} \right] \right\rangle$$

⁵郡司(2010)では、HPSG (Sag, Wasow and Bender, 2003)の意味論を用いて、SEM 素性の中の INDEX 素性の単一化という形で束縛を表示しているが、本稿では、それに対応する表現として、述語論理式の中の変数の同定という形で記述することにする。この方が、後に見るように、「お互い」の相互性を捉えるにはより適切な表現形式である。

⁶「お互い」の先行詞は要素の数が2の個体の集合なので、INDEX の値として与えてある a は、要素2の集合を指す。

ただし、RECP は REFL と同様の非局所素性であり、次の形の束縛原理に従う。

(24) 「お互い」の束縛原理

ARGST 内に RECP 素性をもつ項があるとき、その最上位の項と RECP 素性の値とは単一化可能である。

次の例文に見るように、「お互い」の先行詞も、分離先行詞のような場合を除いては、主語に限られるので、「自分」と同様に、先行詞となり得るものは「最上位」の項としてある。⁷

(25) * 健は [奈緒美と真理絵]₁ にお互い₁ の美点を述べた。

「お互い」が束縛原理によって RECP 素性が単一化した場合、主語が要素数 2 の集合なので、単に集合としての同一性を仮定したのでは意味論として不十分である。そこで、述語論理で「お互い」の意味論を詳しく記述してみる。⁸

(26) $\llbracket \text{お互い} \rrbracket = \lambda Q [\lambda X [\lvert X \rvert = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y \in X [y \neq x \wedge Q(x, y)]]]]$

ここで、主語に対応する変数 X は、要素の数が 2 の個体の集合を外延としてもつ。後半は、 X の要素に関する全称量化だが、2 項述語の Q の第 2 引数は第 1 引数とは異なるという、相互性の制約を課してある。

これにより、同じ節内の先行詞による「お互い」の束縛は次のようになる。

(27) $\llbracket \text{健と奈緒美がお互いを愛している (こと)} \rrbracket$

$$\begin{aligned} &= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{お互いを愛している} \rrbracket) \\ &= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{お互い} \rrbracket (\llbracket \text{愛している} \rrbracket)) \\ &= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{お互い} \rrbracket (\text{Love})) \\ &= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\lambda Q [\lambda X [\lvert X \rvert = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y \in X [y \neq x \wedge Q(x, y)]]]] (\text{Love})) \\ &= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\lambda X [\lvert X \rvert = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y \in X [y \neq x \wedge \text{Love}(x, y)]]]) \\ &= \lambda P P(\{k, n\}) (\lambda X [\lvert X \rvert = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y \in X [y \neq x \wedge \text{Love}(x, y)]]]) \\ &= \lambda X [\lvert X \rvert = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y \in X [y \neq x \wedge \text{Love}(x, y)]]] (\{k, n\}) \\ &= \lvert \{k, n\} \rvert = 2 \wedge \forall x \in \{k, n\} [\exists y \in \{k, n\} [y \neq x \wedge \text{Love}(x, y)]] \\ &= \forall x \in \{k, n\} [\exists y \in \{k, n\} [y \neq x \wedge \text{Love}(x, y)]] \\ &= \text{Love}(k, n) \wedge \text{Love}(n, k) \end{aligned}$$

⁷(25) を少し変えて、使役文にすると「述べ」にとって最上位の項は「奈緒美と真理絵」になるので、「お互い」の先行詞が「奈緒美と真理絵」になり得る。

(i) 健は [奈緒美と真理絵]₁ にお互い₁ の美点を述べさせた。

郡司 (2010, p. 8, (17)) の「健が弟に自分の髭を剃らせた (こと)」の分析参照。

⁸Heim, Lasnik and May (1991, (10)) に、英語の each other の意味論が与えられている。(26) と比較すると、概ね同じ形式化となっているが、2 つ目の変数 (y) の部分も全称量化となっている点が異なる。しかし、筆者たちも自ら述べているように (p. 70)、彼らの形式化は強すぎる可能性もあるので、ここでは、 y に関しては存在量化としておく。以下に示す「お互い」の意味論では、要素の数が 2 の集合しか考えないので、実質的な違いは少ないと思われる。

最後から2行目は、 $|(k, n)| = 2$ が常に成り立つので、1行上の連言を取り去って得られる。

最後の行は、要素の数が2なので、すべての場合を数え上げると、健が奈緒美を愛している場合と、奈緒美が健を愛している場合の2つに限られるので、結局、それらの連言となることから導かれる。

4. 非相互的な「お互いに」の意味論

4.1. 束縛原理の適用除外の例

「自分」に関して、郡司 (2010, p. 12, (27)) では、次のような、束縛原理では説明が困難な「自分」を含む文をとりあげている。

- (28) a. 健の自慢は自分の学歴だ。
 b. 健がまた叱られた。自分が悪いのだから当然だ。
 c. 自分の不注意の結果の事故が健を後悔させた。

「お互い」で同様の文を考えてみる。

- (29) a. 奈緒美と真理絵の不安はお互いの健康だ。
 b. 奈緒美と真理絵がまた喧嘩している。お互いが譲らないのだから厄介な話だ。
 c. お互いの不注意の結果の事故が奈緒美と真理絵を激怒させた。

「自分」の例文と同様に、(29a) では、コピュラの「だ」の項は「奈緒美と真理絵の不安」と「お互いの健康」であり、「奈緒美と真理絵」と「お互い」の間に上位下位関係は存在しない。(29b) は文境界を越える、いわゆる *remote control* の例 (Dowty, 1989) であり、2番目の文の「お互い」は、それ自身が主語という最上位の項になっている。(29c) では、「激怒させた」の目的語は「奈緒美と真理絵」であるが、主語は「お互いの不注意の結果の事故」であり、「奈緒美と真理絵」が「お互い」より上位であるということはない。

これらに対しては、「自分」の分析と同様に、談話性 (logophoricity)、話者の視点などの要素が絡み、統語論・意味論で扱う対象から逸脱しているのかもしれない。

郡司 (2010) でも触れたが、英語にも同様の再帰形の解釈があり、Pollard and Sag (1994); Sag, Wasow and Bender (2003) などでは、束縛原理の適用を受けない、適用除外 (*exempt*) の場合としている。Hoji (2010, footnote 28) でも、Pollard and Sag (1992) を引いて、「お互い」の *exempt anaphor* の可能性を指摘している。⁹

4.2. 非相互的な「お互い」

「お互い」の場合、「自分」と似た点がある。格助詞を伴わない「お互い」のまま、あるいは「に」を伴ったり「互いに」という形で、副詞的に使用できるという点である。この場合、「お互い」は、相互的な解釈を失い、「それぞれに」とほぼ同様の全称量化の意味をもつ。また、相互性の解釈の場合に必要な他動詞構文でなくともよい。

⁹(28a) のようなコピュラ文に関しては、西垣内 (2016) に、「健」が「自分」を束縛し得る位置にある構造から派生する分析が示されており、必ずしも、*exempt anaphor* として扱わなければならないわけではない。

(30) 奈緒美と真理絵は {お互い (に) /互いに} 頑張った。

この場合、「頑張る」は自動詞なので相互的な解釈はできない。上の文の意味は、奈緒美も頑張ったし真理絵も頑張ったということである。¹⁰

このような「お互い (に) /互いに」の用法は、非局所的でありながら相互性の解釈を保っている (29) とは逆に、局所的でありながら、相互性の解釈をもたない。

Nishigauchi (1992) は、Heim, Lasnik and May (1991) による英語の *each other* の分析を踏まえて、日本語の「お互い」および「～し合う」の分析として、分配性 (distributivity) と相互性 (reciprocity) の 2 面性があることを論じて、統語的な分析を提案している。¹¹

「お互い (に) /互いに」の上に見た用法は、まさに、このうちの分配性のみが用いられ、相互性が抑制された用法であると言える。

この場合の意味論は、(26) から相互性の制約をはずした、次のようなものになる。¹²

(31) $\llbracket \text{お互いに} \rrbracket = \lambda P [\lambda X [\lVert X \rVert = 2 \wedge \forall x \in X [P(x)]]]$

ここでは、 P は 1 項述語である。意味論は基本的に全称量化であり、(26) の相互性の部分が欠落している。

自動詞「頑張った」を用いた (30) の意味論を計算してみよう。

(32) $\llbracket \text{健と奈緒美がお互いに頑張った} \rrbracket$
 $= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{お互いに頑張った} \rrbracket)$
 $= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{お互いに} \rrbracket (\llbracket \text{頑張った} \rrbracket))$
 $= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\llbracket \text{お互いに} \rrbracket (\text{Try-Hard}))$
 $= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\lambda P [\lambda X [\lVert X \rVert = 2 \wedge \forall x \in X [P(x)]]] (\text{Try-Hard}))$
 $= \llbracket \text{健と奈緒美} \rrbracket (\lambda X [\lVert X \rVert = 2 \wedge \forall x \in X [\text{Try-Hard}(x)]])$
 $= [\lambda P P(\{k, n\})] (\lambda X [\lVert X \rVert = 2 \wedge \forall x \in X [\text{Try-Hard}(x)]])$
 $= \lambda X [\lVert X \rVert = 2 \wedge \forall x \in X [\text{Try-Hard}(x)]] (\{k, n\})$
 $= \{\{k, n\} \mid 2 \wedge \forall x \in \{k, n\} [\text{Try-Hard}(x)]\}$
 $= \forall x \in \{k, n\} [\text{Try-Hard}(x)]$
 $= \text{Try-Hard}(k) \wedge \text{Try-Hard}(n)$

最後に得られた式は、健も奈緒美も頑張ったということをあらわしている。

4.3. 「お互い片思い」の分析

冒頭の文に戻る。

¹⁰注 3 でも見たが、「自分」にも「自分で」とすると、非再帰的な解釈が生じる。

(i) 健は自分で起き上がった。

この文でも、「起き上がる」は自動詞であり、再帰的な解釈はできない。この場合、「自分で」は「独力で」と同じように解釈される。

¹¹英語の分析では *each* (が束縛する空範疇) が分配性を担い、*other* が相互性を担うとされるが、日本語の分析では、「お互い」が単一の語なので、Nishigauchi (1992) では、空範疇の *pro* を想定し、*pro* が分配性、「お互い」が相互性を担うとしている。

¹²以下では、「お互い (に) /互いに」を「お互いに」という語彙項目で代表させる。

(1) (私たち、) お互い……片思いだね。

この文の「お互い」は、明らかに相互的な解釈ではなく、全称量化の解釈である。つまり、「お互い片思い」というのは「それぞれに片思い」ということなのである。すると、この場合の「片思い」は、2項述語（他動詞）ではなく1項述語（自動詞）であるということになる。

そこで、1項述語の「片思い₁だ」と2項述語の「片思い₂だ」の意味論を次のように設定し、「お互い（に）片思いだ」の意味を記述してみよう。

(33) $[[\text{片思い}_1 \text{だ}] = \lambda x [\exists y [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]$

「片思い₁だ」は項を1つ（主語）とり、主語にとって、誰か片思いの（自分は思っているが、その人からは思われていない）相手が存在するということを示す。これに(31)の「お互いに」の意味論を組み合わせてみよう。

(34) $[[\text{健と奈緒美がお互いに片思い}_1 \text{だ}]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\text{お互いに片思い}_1 \text{だ}])]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\text{お互いに}]([\text{片思い}_1 \text{だ}]))]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\text{お互いに}]([\lambda u [\exists y [\text{Love}(u, y) \wedge \neg \text{Love}(y, u)]]])]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\lambda P [\lambda X [|X| = 2 \wedge \forall x \in X [P(x)]]]([\lambda u [\exists y [\text{Love}(u, y) \wedge \neg \text{Love}(y, u)]]])]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\lambda X [|X| = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]]])]$
 $= \lambda P [P(\{k, n\})](\lambda X [|X| = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]])]$
 $= \lambda X [|X| = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]](\{k, n\})]$
 $= \{k, n\} = 2 \wedge \forall x \in \{k, n\} [\exists y [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]]$
 $= \forall x \in \{k, n\} [\exists y [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]]$
 $= \exists y [\text{Love}(k, y) \wedge \neg \text{Love}(y, k)] \wedge \exists y [\text{Love}(n, y) \wedge \neg \text{Love}(y, n)]$

これは、健には誰か片思いの人がおり、奈緒美にも誰か片思いの人がいるが、存在量化詞 $\exists y$ のスコープが異なるので、それぞれに別々の（可能性のある）相手であるという解釈であり、矛盾はない。

一方、他動詞的な「片思い₂だ」には次のような意味論を与えることができる。

(35) $[[\text{片思い}_2 \text{だ}] = \lambda y [\lambda x [\text{Love}(x, y) \wedge \neg \text{Love}(y, x)]]$

「片思い₂だ」は項を2つ（主語と目的語）とり、主語にとって、目的語は片思いの（自分は思っているが、その人からは思われていない）相手であるということを示す。これに(26)の「お互い」の意味論を組み合わせてみる。

(36) $[[\text{健と奈緒美がお互い片思い}_2 \text{だ}]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\text{お互い片思い}_2 \text{だ}])]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\text{お互い}]([\text{片思い}_2 \text{だ}]))]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\text{お互い}]([\lambda u [\lambda v [\text{Love}(u, v) \wedge \neg \text{Love}(v, u)]]]])]$
 $= [[\text{健と奈緒美}]([\lambda Q [\lambda X [|X| = 2 \wedge \forall x \in X [\exists y \in X [y \neq x \wedge Q(x, y)]]]])]$

- 郡司隆男 (2010) 「再帰化再考」 *TALKS (Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin)* 13: 1–14.
- Heim, Irene, Howard Lasnik and Robert May (1991) Reciprocity and plurality. *Linguistic Inquiry* 22: 63–101.
- Hoji, Hajime (2006) *Otagai*. In: Ueyama, Ayumi (ed.) *Theoretical and Empirical Studies of Reference and Anaphora—Toward the Establishment of Generative Grammar As an Empirical Science*: 126–138: A report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B), Project No. 15320052, Supported by Japan Society for the Promotion of Science, Kyushu University.
- Hoji, Hajime (2010) Evaluating the lexical hypothesis about *otagai*. *Linguistic Research* 27(1): 65–119.
- Nishigauchi, Taisuke (1992) Syntax of reciprocals in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1(2).
- 西垣内泰介 (2016) 「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150: 137–171.
- 岡田恵和 (2017) 『NHK 連続テレビ小説「ひよっこ」シナリオブック (下)』東京ニュース通信社, 東京.
- Pollard, Carl J. and Ivan A. Sag (1992) Anaphors in English and the scope of binding theory. *Linguistic Inquiry* 20: 365–424.
- Pollard, Carl J. and Ivan A. Sag (1994) *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Sag, Ivan A., Thomas Wasow and Emily Bender (2003) *Syntactic Theory: A Formal Introduction, 2nd ed.*. Stanford: CSLI Publications.

Author's web site: <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>

(受付日: 2017 年 12 月 11 日)